

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 (心理学)	氏名	藤 川 卓 也
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p style="text-align: center;">動作法と認知制御の関連 ——順向性制御・反応性制御に着目した 動作法の作用メカニズムに関する考察——</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p style="text-align: center;">主 査 教 授 服 卷 豊 審査委員 教 授 中 條 和 光 審査委員 教 授 湯 澤 正 通 審査委員 准教授 中 尾 敬</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、心理的問題を抱えるクライアントへの動作法適用がどうして彼らの問題解決につながるのかという疑問への課題解決を試みた研究である。動作法は、日本で考案された臨床技法であり、身体の動きを介して自己コントロールを促進するとされている。本論文は、臨床心理学の理論・技法に対して認知心理学の認知制御モデルとその実験パラダイムを用いて実証的な検討を加えたものである。</p> <p>論文の構成は、次のとおりである。</p> <p>第1章では、本研究の背景と目的を述べている。身体の動きを介して自己コントロールを促進するとされる動作法による心理的問題の解決プロセスについて自己コントロールの観点から考察を試みている。動作法では、動作のプロセスに「意図・努力・身体運動」という過程があり、自己は身体及び身体感覚をモニタリングし、動作遂行を調整しているとされている。動作課題の遂行によって自己コントロールを促進することと、日常生活の維持を支えている基盤としての自己コントロールの促進とのつながりを見出し、そこに認知制御を順行性制御と反応性制御の2つの制御戦略に区別する Braver (2012)の認知制御理論 (Dual Mechanism of Control Model (DMC model))を適用する。本論では、動作法介入の前後において実験的手法を用いて順行性制御と反応性制御を測定し、両認知制御戦略の優位性やバランスを検討する。このことにより動作法という心理療法が日常生活の基盤となる自己コントロールをどのように促進するのかを明らかにし、動作法の新しいメカニズムを提案することを目的とした。</p> <p>第2章では、大学生・大学院生28名(女性16名)を対象に、身体への内受容感覚への注意傾向と認知制御戦略の関連について質問紙(内受容感覚への気づきの多次元的アセスメント: MAIA)と実験操作のAX-CPT及び修正ストループ課題を用いて検討した。その結果、内受容感覚への気づきとしての注意制御、自己制御、心配しない、信頼するなどの因子が自己コントロールの基盤としての反応性制御を高めることを明らかにした。この結果は、動作法による心理援助技法として身体感覚に注意を向けながら自己活動を高めるという自己コントロールの理論と矛盾しないことを示唆している。</p>			

第3章では、大学生・大学院生28名（女性16名）を対象として動作法体験が制御戦略に及ぼす影響を検討するために、動作法（動作法群）及び運動教示（能動的統制群）の介入前後における実験操作の AX-CPT 及び修正ストループ課題の比較と体験後の動作体験尺度を用いて検討した。その結果、いずれの群においても順行性制御が有意に強化され、動作法群においてのみ反応性制御が高まっていた。運動教示による運動は、順行性制御のみを高め、動作法による動作課題遂行は順行性制御及び反応性制御のいずれも高まることが示唆された。動作法が心理援助として動作者の内的活動としてのフィードバックならびにフィードフォワードのプロセスを活性化することと一致する。

第4章では、動作法群、能動的対照群に受動的統制（運動なし）を追加し、同様の実験操作を行った。その結果、いずれの群においても AX-CPT、修正ストループ課題における反応時間の有意な短縮が確認され、認知課題の練習効果が明らかになった。また、受動的統制群の AY 試行の誤答率増加及び事後テストでの BX 試行 < AY 試行より、認知課題の反復測定が順行性制御を高めることが示唆された。さらに、受動的統制群と能動的統制群は反応性制御に影響がなかった。このことより、第3章の動作法群のみにおいて反応性制御を高める結果がより重要な意味を有することが明らかとなり、追試で行った修正ストループ課題での比較においても動作法群のみで反応性制御の強化が示唆された。

第5章では、総合考察として動作法と認知制御の関連、動作法の自己コントロールへの作用、本研究の課題と展望を述べ、心理療法の一つである動作法が自己コントロールを促進するメカニズムの説明理論として Braver (2012) の DMC model を援用することができ、かつ、認知制御戦略として順行性制御と反応性制御のバランスをよくすることが動作法による心理援助の鍵であることを示した。

本論文は、次の3点で高く評価できる。

1. 動作法においては、動作課題遂行を「意図・努力・身体運動」という過程で捉える。この心理的過程を、認知心理学的な自己コントロールモデル、すなわち順行性制御と反応性制御による自己コントロールのモデルを用いて説明した。
2. 動作法の効果生起機序について、動作課題遂行が順行性制御と反応性制御という2つの認知制御戦略のバランスを整えることを認知心理学の実験パラダイムを用いて実証的に明らかにし、動作法による心理的問題の解決における自己コントロールの関与を明らかにした。
3. 本論文は、動作法の理論的説明を認知心理学の実験パラダイムを用いて実証した初めての研究であり、実験的アプローチによって臨床現場で起こっている心理的变化のプロセスの一端を明らかにできることを示し、臨床心理学と認知心理学の融合した新しい研究分野を開拓し、今後の学際的研究の下地を作ったといえる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（心理学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和5年2月21日